

中国青少年にとっての日本型アイドル養成団体の意味 及び関係性に関する一考察

登坂 学

A Study of Meaning and Relationship of Japanese Idol Training Groups for Chinese Youth

Manabu TOSAKA

Abstract

This paper presents an investigation of the true meaning and influence of Japanese popular culture, especially around idols, for Chinese youth. First, I investigate in the second section how Chinese youth and adult society perceive idols. Then, in the third section, I take a look at how the youth actually enjoy observing Japanese idols and attempt to relate to them as well as what sort of interaction and cross-fertilization is occurring as a consequence of this: we can see a generational and cultural gap between the values of adult society and those of the youth community. In fact, Chinese youth are a prominent example of the casual transgression of an idealized image stipulated by adult society. What sort of influence does this popular youth culture prevailing in China and its psychological penetration have on society? This is a point that must be considered when adopting "Cool Japan" as a policy and trying to export culture. Simultaneously, this study suggests that the Japanese idol training system holds the potential for pluralistic interaction, growth, and meetings among youth; in other words, it holds a socio-educational significance.

Key words : Japanese Idol Training Groups, Dream of Youth, A place of my own, Subject Formation

キーワード : 日本型アイドル養成団体, 青少年の夢, 居場所, 主体形成

1 はじめに

中国語で「アイドル」は「偶像」(ou3xiang4)と表記され発音される。中国におけるこの言葉は、我々日本人がイメージするような「アイドル」をそのまま意味するのではなく、比較的広い意味で解釈されている。興味深いことに、広義には歴史上の重要人物、例えば政治家や武将、思想家や文化人等も「偶像」と認識されるのであり、その場合はその人の生き方や人生哲学に深く関わってくる重厚な意味を持つポジティブな存在としての位置づけがなされているのである。

一方で青少年にとって一般的に「アイドル」といえば歌謡、映画、テレビ等のメディアに登場する若手芸能人のことを指す。この点においては日本と全く同じであり、この場合（それを組織するのは大人の側であるにも関わらず）大人社会から見れば好ましいものとはいえ、どちらかといえば軽薄短小な存在として認識されている。（それはこの分野を学問として取り上げようとする試みが極めて少ないことから窺われる。ただ、我々の側にも「学問研究に値しない領域、相応しくない領域」という先入観があるのではないだろうか？）

前稿¹⁾でも触れたように、筆者は我が日本政府が進め

る「クールジャパン」政策に注目すると同時に、この政策の成立の基盤にある、数十年前からアジアを始めとする全世界で歓迎され、受容され、支持されてきた我が国大衆文化の持つ底力に強い興味と関心を抱いてきた。

とりわけ政治体制が異なり、歴史的経緯から度々関係がぎくしゃくする中国において、これら若者文化が担う橋梁的役割は、誤解を恐れず言うならば、正規の外交団が果たす以上の役割やパワーを発揮してきたと実感するところである。平成25年度の日中交流研究支援事業における東アジア協働体評議会「未来志向の関係構築における日中青年交流の在り方」が、いみじくも「中国の若者は、主として新聞やテレビを通じて政府によってコントロールされた画一的な日本イメージを受け取っているが、それだけでなくインターネットをはじめとする他のメディアによって（入手ルートの適法性はともかく）、現代日本の社会や文化、とりわけ漫画やアニメ、アイドル、テレビドラマといったポップ・カルチャーや日本製品に関する情報も持っている」²⁾と述べている通りである。

さて、そのなかでも同時代を生きる同年代のアイドルの存在は、中国青少年層にも熱烈に支持され、大きな影響を与えていると考えられる。そうであれば、そこには大小様々な形での膨大な数のインタラクションが存在し、それに伴う社会教育的意義も発生してくるのではないか。

例えば、AKB48といえば、誰もが知るアイドルグループである。秋元康氏が総合プロデュースを行うこのグループは、2005年の結成以来、苦境を経験しつつもヒット曲を連発し、一躍スターダムにのし上がった。その後名古屋にSKE48、大阪にNMB48、博多にHKT48と着実に勢力を拡大している。直近では新潟にも新グループが成立している。

そしていまや海外にも姉妹グループが存在する。まずインドネシアのジャカルタにJKT48、次いで中国上海にSNH48ができ、活動を展開中である（北京や広州にも姉妹グループを作る計画があると仄聞する）。現地のファンも増加を続けており、日本以上に熱い応援活動を行っている。当初、日本式のアイドル養成システムが現地で本当に受け入れられるか疑問の声があった。しかし立派に現地に根差し、ファン層を拡大しているのである。

国内はもとより海外でも人気を集める理由は何か。その一つが、普通の女の子が厳しいレッスンを受け、公演やファンイベントで活動することを通じてパフォーマンス面でも精神面でも成長していくプロセスを見せることにある。つまり芸能活動を通じた「自己形成」や「主体形成」の過程なのであり、それは国籍や民族を問わず受け

入れられる可能性があるのではないか。

これらは確かに利益追求を目的とする私企業の営みである。しかしそこに集う少女たちにとって、あるメンバーにとってはそれ自身が「学校」であろうし、あるメンバーにとっては「課外活動」の大切な居場所でもあろう。周知のとおり、現在わが国には全国各地に無数のアイドルグループが存在する。流行産業を商業主義・消費志向で軽佻浮薄とみるのは簡単だ。しかしこのような時代だからこそ、そのパワーの源に注目する必要があるのではないだろうか。

小論では以上のような観点から、前稿を引き継ぎ継ぐ形で、既に雑誌やインターネット空間で公表済みの文書、ブログ等記事及び映像アーカイブを読解及び分析することにより論考を進め記述していく。これまで、アイドルに関する言説はもっぱら熱烈なファン（オタク、ヲタとも通称される）によって、古くは同人雑誌、現在ではウェブ上のBBS（掲示板）やSNS（ソーシャル・ネットワーキング・システム）等で展開することが多かった。外国のアイドルの発言も同好の士によって一両日中には翻訳され、インターネット上に公開され共有されるのである。これは文化交流のみならず研究者にとっても有力な情報源となる。

本論ではその手順として、まず第2節で中国社会及び大人社会がアイドルをどのようにとらえているか、つまり大人社会の側が青少年世代をみる「眼差し」がどうであるかという問いを考察する。一方第3節では、実際にアイドル文化を受容し楽しむ青少年がアイドルをどのような眼差しでみておりどのように関わろうとしているか、そこでどのような相互交流・相互作用が起こっているかに注目する。これによりアイドルとどのように向き合うかという問題を大人社会と青少年コミュニティの間のジェネレーションギャップ、言葉を換えれば世代間の文化的・道徳的矛盾として捉え返すことができる。それは同時に、我が国政府が政策レベルで重要な輸出商品として意識するかしないかに関わらず中国に流通し消費される若者大衆文化及びその精神的浸透が社会とどのような緊張関係を生ぜしめるかという論点とつながると同時に、青少年間のインタラクションの可能性を有するものとして、どのような社会教育的意義を持つのかという論点にも繋がっていく。

この対比により、青少年の側は大人社会の側の憂慮や抑制を超克した異なる次元で、既にアイドル文化を通じたインタラクションと自己形成を進めていることに我々は気づくであろう。

2 アイドル文化と大人社会の眼差し

2-1 アイドル文化に対する学校教育現場の眼差し(その1)

実際の教育現場において、アイドルとは一般的にどのような捉えられているのであろうか。重要なのは、この問いが「アイドル好きの中国青少年は大人社会から、つまり体制側のどのような眼差しによって攻囲されているか」という論点に転換できる点にある。教育現場において中国青少年は、アイドルに対してどのようなスタンスをとることを要求されているのであろうか。公表された文献資料の中から現場の教職員の声を紹介したい。

まず注目したのが浙江省嵊州市の中学に勤務する龔樂穎氏の「現代流行文化の青少年に対する影響」と題する論考³⁾である。その内容は概要以下のとおりである。

龔氏は、青少年の文化と価値観の表出は技術の進歩と密接にかかわっており、多元的に発展していると指摘し、「アイドル崇拜」、「流行消費」、「ネット」、「韓流」、「流行語」等のキーワードで説明を試みる。その中で「アイドル崇拜」とは、「目下の中国青年のより多い一種の娯楽活動であり、彼らはアイドルと交流することを熱望し、自分のアイドルを他の人と談ずるのが好きで、アイドルの選択範囲は広い。早い時期から青年たちにはアイドル崇拜が存在していたが、新たな時代の経済発展と社会進歩に伴い、様々なアイドル及びその崇拜は先進的な技術手段を利用して広まっており、アイドル崇拜はより勢いを増している。ネット上の「バーチャルコミュニティ」が青年に更に多くの手段と便利で迅速な情報空間と交流状況を提供している、と分析している。そして龔氏は、それら青少年文化のポジティブな影響として、まず学生生活を豊かにできる点を指摘する。つまり、様々な文化に触れることでそれを模倣し自己表現やパフォーマンスをしたり、それを通じて多くの友人と交わったりすることができ、生徒の視野を広げることができるという考え方である。第二に、教育資源を開拓できる点である。つまり、流行文化も社会文化の重要な構成要素であり、青少年の社会化と成長に重要な意義を持っているのであるから、一部の秀逸な流行文化を教育現場に取り入れることは学校教育の活性化に繋がるという考え方である。第三に、学園文化の繁栄に繋がる点を挙げている。生徒こそ学校文化の創造主体であり、流行文化は生徒を通して作用し、学園文化の繁栄と発展にも影響する。青少年の模倣能力は素晴らしく、流行文化の内容や形式を用い学校生活と結び付けて創造していく。それが学園フォークソング、キャンパス流行語、学生自作自演のキャンパス

演劇であり、これらは学園文化を繁栄させ豊かにするうえで重要な意義を持っている。

その一方で龔氏はネガティブな影響を三つ指摘する。第一に、アイドルへの耽溺が学業と健康に影響する点である。青少年は心身の発達過程にあり、受容能力は強いが自己抑制や判断能力が弱いため流行文化に夢中になる中で自分では抑制できなくなる。龔氏は例として香港や台湾のスターに夢中になるあまりCDやコンサートに時間と金銭を費やし、命までも失ってしまった例を挙げる。

第二に、過大な追求が道德問題を引き起こす点である。新興の流行文化が「低レベルの満足」を広め、その結果人々の精神的追求や感覚器官の楽しみを誤らせるといのである。感覚器官の強烈な体験の中、流行文化は若者を浮ついた状態にさせ、内面においては自分の感覚による感情的な表現しかできず、現実をしっかり認識し独立した思考が難しくなる。外界に対しては逸脱行為や道德的責任感や行為の欠如として現れる。またバーチャルコミュニティにおける現実と仮想現実の混乱は道德的認識と判断能力とりわけ道德的実践能力を弱体化させ、社会的な道德問題を引き起こすのであると。

第三に価値基準の混乱がアイデンティティの危機をもたらす点である。流行文化が青少年にもたらすのは新奇で限りなく感覚器官を刺激する「記号の誘惑」である。そこに含まれる衝撃と破壊的なパワーはこれまでに培ってきた秩序や意義感を破壊する。こうなると青少年は自己の感受性から出発するのみで、自己中心的となり、遠大なる人生の理想を追求する姿勢や人生の意義についての厳粛な思考が弱くなり、アイデンティティの危機に陥るといのである。それは学園で流行している西洋の年中行事にもみられ、これらは国家と民族の伝統的価値規範を弱体化させ、民族の伝統文化のアイデンティティ危機をもたらすのであると。

ではそのようなマイナス面での影響を及ぼしうるアイドル文化を含む大衆流行文化に対し教育現場はどのような姿勢で臨もうとしているのであろうか。龔氏は次のように簡潔に述べる。「流行文化は現代社会生活の重要な構成部分の一つとなっており、青少年学生の健康的な成長と学校教育の順調な展開に重要な影響を有している。劣ったものと優れたものが併存している流行文化に対して玉石混交にしたり一概に否定したりすることはできない。このため我々は科学的で慎重な態度をもって、流行文化の学校文化に対するプラス面の影響を十分に発揮させ、そのマイナス面の影響を制限し弱め、学生の全面的で健康的な発展を促進しなければならない。」(傍線筆者)

しかし、劣ったものと素晴らしいもの、玉と石、積極

的な影響と消極的な影響とはどのような基準で判断されるのであろうか。全面的で健康的な発展と一概に言うが、それは一体どのようなものであろうか。そして、それを決めるのは誰なのであろうか。さらに、それは青少年にとっての最善の利益と言えるのであろうか。

1-2 アイドル文化に対する学校教育現場の眼差し(その2)

次に注目したのが、^{せんせいしやうゆりんし}陝西省榆林市の教育サイトに掲載された論文である⁴⁾この論文は簡潔なものではあるが、いわゆる我々日本人がイメージする「アイドル」(つまり歌謡、テレビ、映画等のスター)に絞って論じている点が注目される。冒頭で筆者は、「歌謡スター、映画スターからボールゲームのスターまで洋服のスタイルから髪型まで留まるところを知らず、大都市から小さな村に至るまでアイドルに夢中になる若者は範囲、内容、地域ともに広がりを見せており、このことは保護者や教師たちを心配させている」と問題提起を行う。さらに筆者は保護者や教師の側の言い分を紹介する。「保護者はその多くがこのようなアイドル崇拜をまるで洪水か猛獣であるかのように見なしており、排撃しなければならぬと考えている。これら飛んだり跳ねたり、変な服装や髪形をしたりする形式に拘らぬアイドルは、子どもを駄目にし、子どもを彼らと同じような得体の知れないものにしてしまう。このままでは勉強に影響し、将来の生活に問題が生ずるだろう。勉強と試験は保護者の最も重視するところでありつづけ、勉強のためならば一切をなげうっても差し支えないと考えている。ましてやアイドル崇拜など保護者にしてみれば子どもの勉強や試験にとって百害あって一利なしなのであり、それゆえに彼らは恨み骨髄に徹すのである」と。

そのうえで筆者は子どもの側の現実を紹介する。以上のような包囲封殺にもかかわらず子どものアイドル崇拜は止む気配がない。スターのコンサートに遥か遠くから駆けつけたり、一目見るために劇場で一晩夜明かしをしたりするのである。歌謡スターのCDを購入するために母親と口論になった女の子は、なんと自殺をしてしまったのである。子どもに言わせれば、スターの追っかけをするためならば一切をなげうっても差し支えないのである。これに対し筆者は、アイドル崇拜の原因を知っていれば恐れる必要はないと述べる。それは青春に伴う正常な現象であると。人の成長の過程がそもそも絶えず偶像を立てたりそれを否定したりの連続なのであると。

さらに筆者は青少年のアイドル崇拜の原因を次のように分析しているが、これは一般的な中国知識人のアイドル観を反映していると考えられ興味深いので概要を提示

する。

- 1) 流行に乗るため。時代は発展しつつあり、流行は時代に従って発展していく。流行は人々の生活 방식に影響するだけでなく、人々のアイドル崇拜にも影響する。青少年は新しい事物にとっても敏感であり、とりわけアイドル崇拜という新しく生じたことに対して特にそれをたやすく受けて入れてしまう。同時に彼らは大衆心理を持っており、クラスメートや仲間がアイドルを崇拜するとき、彼らはそれを受け入れてしまうのである。例えば一部の青少年がジェイ・チョウ(筆者注:周傑倫、台湾出身の歌謡スター)に夢中になるとき、大衆心理が働くのである。ジェイ・チョウが売れっ子であるときにもし自分が彼のことを知らなかったら人からひどく嘲笑されるであろうから。
 - 2) 手本とするため。現在の中国人は宗教を信じているとはいえないので、人々は利益を最大限に追求すると同時に精神的自我を失いつつある。今は手本が少ない時代であり、手本を求める時代である。このような社会の変化が激しい時代を生きる青少年は、まだ心が完全に成熟していない状況にあって、アイドルは青少年が困惑から抜け出し、順調に社会化を果たす上で重要な意義がある。
 - 3) 反逆心理のため。上の世代は彼らの思想やアイドル(偶像)を次の世代に押し付けようとする。下の世代は新しいアイドルを見つけ出してこれに対抗しようとする。アイドル崇拜は人の思想の反射である。両世代の思想は異なり、アイドル崇拜も自ずと違ったものになる。偶像崇拜の闘争とは、すなわち両世代の人による思想闘争でもある。青少年はアイドル崇拜の違いで彼らと上の世代の違いをアピールしているのであり、反逆心理を表現しているのである。
 - 4) 不満をぶちまけるため。教師の高圧的な教育や保護者の厳しい躰に直面したとき、青少年は怒っても言うことができない。彼らは別のルートで教師や保護者に対する不満をぶちまける必要がある。このときアイドルが現れて問題を解決する手助けをするのである。^{ホァンヂューグーグー}「還珠格格」(筆者注:清朝の宮廷が舞台のシンデレラストーリー。90年代に高視聴率を稼いで社会現象にまでなった。)の^{シヤオイェンズ}「小燕子」などはまさに今の青少年の言えないことを言い、できないことをやったアイドルである。だから青少年が小燕子を熱烈に崇拜するとき、保護者や教師は心の底から彼女を恨めしく思ったものである。
- 最後にこの筆者はアイドルに夢中になる青少年をどのように指導するかについて次の四点で提案している。

- 1) 青少年が正しいアイドル崇拜観を確立できるように指導すること。手本のパワーは無限である。スターはスターになるべくしてなったのであり、必ず人よりも優れたところを持っている。保護者や教師は、彼らの表現する外側のものだけを学ぶのではなく、内にあるものを学ばなければならないと指導すべきだ。
- 2) 世代間格差を埋めて理解を促進すること。世代間格差とは社会における異なる世代間にあつて価値観や行為の選択等の方面に現れるギャップ、衝突のことを表すが、社会学の角度から見れば世代間格差は社会構造や社会生活の変化の速度や程度を反映している。社会の変化は客観的なものなので、世代間格差は避けることはできないものであるが、縮小できないということではない。生活環境や思考方式及び受けた教育が違うのであるから、保護者や教師は青少年を理解しなくてはならない。アイドル崇拜に対しては正しい指導をすべきであり、粗暴な手段で対応してはならない。そして青少年のほうも保護者や教師の気配りを理解し、彼らの合理的な提案を受け入れ、正しいアイドル崇拜観を打ち立てなくてはならない。
- 3) 平等な交流をすること。実際の生活の中で、多くの教師や保護者は自分が正しいと思う方法で子どものアイドル崇拜に対応している。彼らは子どもの心をどれだけ傷つけているか知らないのである。「子どもは私のものだ。好きなやり方で教育する！」このような考え方がまだ多くの保護者の頭に存在する。「学生は教師に服従するものだ」というのが至極当たり前のことになっている。彼らは青少年を痛烈に皮肉ったり、あてこすったりし、叱ったり、罵り殴ったりもする。これでは青少年は面子や自尊心を無くし、平等な対話や交流などできはしないのである。
- 4) 青少年が正しい学習観を打ち立てるように指導する現在の社会における競争は激しさを増し、学位主義の傾向はより鮮明になっている。このことは大学入試を過熱させ、入試教育がますます激烈になっている。このような状況下で、保護者や教師は点数第一主義に陥り、アイドル崇拜は二の次になっている。多くの保護者や教師にとって点数こそが学生の優劣を評価する基準となっており、点数こそが学生の栄辱を決定する要素となっており、本来平等である学生は点数のために不平等に扱われている。試験の成績が良い学生は保護者や教師の眼中の寵児となっており、成績の悪い学生は冷遇されているのである。
これこそが青少年のアイドル熱に如何に対応するかという問いに対する教育現場のマニュアルであると考えら

れる。

1-3 アイドル文化に対する学校教育現場の眼差し(生徒の側の自己抑制)

もう一つ重要なのが、生徒の側の自己抑制である。これに答えるためのヒントとして、今回筆者は様々なテーマの模範論文を紹介するウェブサイト注目した。ここでアイドルに関する模範論作文を検索し、リストアップされた文献を縦覧しようと試みたのである。

その結果、この問いに適合する幾つかの注目すべき題目が浮上した。それが以下に提示する「キャンパスにおける『アイドル熱』と冷静な思考」⁵⁾と題する中学生向けの学習用に執筆された模範論作文である。これは教育現場の意向を明確に代弁する内容であると思われるので要約することなく翻訳したうえで資料として提示したい。

【資料1】

「学校生活において、多くのクラスメートがアイドルを崇拜している。彼らは歌手や映画スターや球技のスタープレイヤー等を鑑賞し、溺愛している。アイドルの干支、生年月日、趣味、興味及び面白いこぼれ話や裏話をいくらでも話すのである。また念を入れてアイドルの服装を模倣し、アイドルの写真で部屋を飾っている。これらは一部保護者の、このままでは学習と健康の障害になのではないかと不安を引き起こしている。自分のアイドルを持つべきではあるが、アイドル崇拜は加減が必要であると私は考える。

アイドル崇拜は一種の魔力であり、人の感情を一種のおかしな状況に陥らせる。アイドルを好きになると、朝に夕に飽きずに眺め、昼も晩もそのことを考えてしまう。我々の崇拜するアイドルは多くが実際にみたこととはなく、そのアイドルが主演する映画をみただけであったり、歌を一曲聴いたことがあるだけだったりするが、こんなにも強烈に熱中させうるのである。この魔力は何であろうか？

心理学者はこう考える：アイドル崇拜は個人が他者の言動及び自分の価値を認識するプロセスであり、その核心は個人の感情と自己認識にとって必要な満足である。この意義から言うならば、アイドル人物の存在は生活の手本となり、また無限の原動力と情熱を生じさせるのである。つまりアイドルの言動は人々に、極めて大きな力で、努力して学習し、自ら進んで実践させることすらできるのである。従って生活においてアイドルは必要なのであり、アイドルは人の生活に彩りを加えるのである。その実、我々の成長には多くのマ

イラストー的な人物の激励が必要ではないだろうか。

当然、我々はアイドルを好きになる方法を正しく学ばなければならない。我々があるアイドルを好きになるとき決して過分に美化したり誇張したりしてはならない。もしそうなれば、ある種の無分別や熱狂的な追求を容易に引き起こし、その結果、必ずやアイドルの表面的イメージの崇拜に陥って抜け出せなくなり、自分が極めてちっぽけであることを思い知ることになる。アメリカからの最近の心理学レポートによれば、15~45歳500名の男性のうちの多くが“ビル・ゲイツ財産崇拜症候群”にかかっているとのことである。ゲイツを前に引け目を感じ、自分は意気地がなく、ゲイツのように世の中をあっと言わせる事業を興せないと恨み言を言い、酒を飲んで憂さ晴らしをする人もいるのである。これらの人は、一方では第二のゲイツになることを夢見て猛烈に仕事をし、家族や親友を顧みなかったりする。また一方では永遠にゲイツに追いつけないことで弱気になって、気持ちが大きく高まったり落ち込んだりするのである。このように、過分なアイドル崇拜は自己の成長に影響するのである。

我々があるアイドルを崇拜するのは元来その事業成功の基礎やその人格的魅力を認め、自己の成功の養分を獲得するためである。人々がビル・ゲイツの辛酸を嘗め苦勞に耐える姿やどこまでも耐え抜く姿、新しいものを作り出すことに長けていることを崇拜するのである。マイケル・ジョーダンの謙虚さや憤り深さ、力一杯戦って勝利を掴もうとする姿を崇拜するのである。それ故にこれら優秀な資質を学ぶのは有益なことである。反対に、もし我々があるアイドルを崇拜するとき、その外見的イメージのみに夢中になり内面を重視しないならば、きっと我々の成長にマイナスの影響を及ぼすだろう。ある同級生は教科書やノートに“アイドルたち”の写真をたくさん貼りつけている。授業の時など教師の話に思考が追いつかず、アイドルのことばかり思い巡らす……挙句の果てにはいたずらに月日を過ごし、学業が疎かになってしまう。

アイドル崇拜は青少年の感情を満たすために必要なものであり、その心の成長に必要なプロセスである。しかし常に覚えておかねばならない。我々が一人のアイドルを好きになることの本质は、より一層自分を激励し、自己を形成するためなのであり、それにより自己の生活や学業上の成功を獲得することなのである。“追っかけ”の夢と幻の中に日夜惑溺し、歳月を無駄にし、青春をいたずらに過ごすことではない。

これを見ると、青少年の偽らざる気持ちを代弁しているとともに、保護者や教師など大人の世代の現実的な思考も反映したバランスのとれたものとして記述されていることが理解できる。「大人にとっても安心できる」青少年の姿がここに投影されているのであり、青少年とアイドルを捉える上での(こうあるべきだとの)スタンダードな「眼差し」ということができるのである。このことから、少なくとも建前論としては学校教育現場も、生徒の側も、同様のスタンスを共有しているようにみえるのである。

では現実のファンの青少年はどうであろうか。大人の指導的言説に沿ってアイドルを応援し、分を守って(つまり一線を画して)生活が続けるのであろうか。それとも大人が規定する以上のもの、或いはその枠外にあるものを得て、自己形成を遂げるのであろうか。

3 日本発アイドル養成団体と青少年の実際

3-1 アイドルファンの事例より

前節では理性的に抑制された大人社会の側のアイドル観を中心に見てきた。では現実の青少年はどうであろうか。ウェブ上のブログや中国版ツイッター、各種掲示板や質問コーナー等の意見主張を發表し相互交流するコンテンツに注目し、そこに記述されている若者の声を丹念に読解することで実像が見えてくる。紙幅の関係で多数を紹介することはできないため、大人の側のアイドル観と一線を画するものに注目してみたい。次に紹介するのは、ウェブ上の知識・経験・見解の交流サイト「知乎」にアップされていたハンドルネーム“初菱”さんという女性ファンの投稿である⁶⁾。

「私も女子生徒です。小学校5年生のころからAKBのファンになりました。あの時はまだ神7(※筆者注:前田敦子・大島優子・篠田麻里子・渡辺麻友・高橋みなみ・小嶋陽菜・板野友美のこと)がいましたね。彼女たちは舞台の上で本当に光り輝いているように感じました。彼女たちが歌ったり踊ったりしているのを見て本当に羨ましいと思ったんです。もし自分もそのメンバーだったらいいなあといつも思っていました。(でも私、歌はだめだしダンスも下手ですから)

後になって私たちにも48グループができるって聞いて、自然と注目するようになりました。始まったばかりのころはちょっとパツとしませんでした。でも彼女たちはどんどん美しくなっていました。歌や踊りもどんどんうまくなっていきました。多くの人が彼女たちを好きになってくれると、私もうれしいんです。ほとんどの

メンバーが私にとってはお姉さんなんですけど（でもある種、育てているっていう感覚があるんです？ ●●?）

初めて劇場に行ったとき、座席で泣きそうになりました。見終わった後、勉強にも身が入りましたよ（笑わないでね）。

でも私の妹がテレビで彼女たちを見たとき、あれこれケチをつけたり、大したことないとか言われたりしました。

こういうアイドルと一緒に成長するっていう感覚、どうやったらあなたに分かるかしら？

要するに、私はその実、彼女たちをパラレルワールドにいる自分だって思っているんです。私の心に秘めたアイドルへの夢をやり遂げてくれる人だって。」

自分の生き写し。この視点は大人の側のアイドル観には見られなかったもので、斬新である。自分のかなえられなかった夢を、あの子ならばきっと実現してくれる。ならば余暇時間を使って、彼女の活躍を応援しよう。お小遣いの範囲内で、或いは頑張っただけで、出来る限りの応援をしよう。自分が幸せになるよりもまず「押し」である彼女の自己実現が大切。それを見ることのできる自分ももっと幸せだ。このように考えるファンが、筆者が現地で知り合ったファンの中には実に多いのである。大人は果たしてこのような考え方を転倒しているとして一蹴できるだろうか。

なお、この点に関わる量的・質的調査を伴うフィールドワークは、然るべき手続きを経たのちに実施し、再度公開したいと考えている。

3-2 メンバー（馮薪朶さん：SNH48チームNⅡキャプテン）のケース

更に重要なのは、一ファンとして当該グループやそこに所属するアイドルを応援するだけではなく、自らアイドルを志願し、芸能界に飛び込もうとする青少年が引きも切らないという現実である。前稿で紹介したように、当該アイドルグループが中国全土で新メンバーを募集すると、毎回数万人を下らない応募があるのである。つまりこれは、これまで述べてきた日本アイドルとのインタラクションがもたらした顕著な結果であるとも言えるのではないだろうか。その当事者の声に耳を傾けることにより、大衆文化活動、とりわけ現代アイドル団体やその養成システムの有する少なからぬ社会教育的意義が示唆されるのではないだろうか。このような考えから本項では当該アイドルグループの草創期に入団し、以来コツコツと努力を続けてきた中堅メンバーの生活史から考えた。SNH48チームNⅡ（通称N隊）のキャプテン（隊長）を務める馮薪朶さんのケースである。中国のポータル

サイト「^{バイドゥ}百度」のコンテンツ「百度百科」（インターネットの百科事典）によるとプロフィールは次のとおりである⁷⁾。馮さんは1992年に中国の遼寧省大連市で生まれた。2013年8月18日、SNH48の最終選抜を通過して、34名の合格者の一人となった。9月5日には二期生として正式なメンバーに昇格、31名の正規メンバーの一人となった。その後、2013年11月2日には「シアターの女神」公演に初出演、2013年11月16日に広州で初めての万人規模のコンサート「この一年間、僕たちが追いつけたSNH48」に出演した。2014年6月7日、初のミュージックビデオ「サッカーパーティ」を撮影、2014年7月26日「前しか向かねえ」コンサート及び第1回総選挙に参加、圏外だったものの「SNH48総選挙ネット人気至高賞」では第7位を獲得している。前稿で触れたが、そうこうしているうちに、それまでキャプテンであった徐言雨^{シュー・イエンユイ}さんが脱退、その跡を継ぎ2015年2月13日にチームNのキャプテンに任命されたのであった。2015年3月30日、第22回東方風雲榜「当地の傑出した芸能人賞」をチーム全員で受ける。そして7月25日に行われた「夢は高く飛ぶ——SNH48第2回アイドル年間人気総選挙」では12位の好成績で選抜入りを果たしたのである。

彼女の入団以来の発言や記述を丹念に拾ってみると、中国のごく普通の女の子がどのような子ども時代を送り、そこでの日本のアイドルとの出会いがどのようにその後の人生に大きな影響を与えていったかが理解できるのである。紙幅の関係でそのすべてを紹介することはできないが、最も典型的な資料を検証してみる。

なお、本資料は2015年7月に行われた「SNH48第2回アイドル年間総選挙」に先立ち集票のために行われた各メンバーによる一連の個人演説から起こされた記録文書がもとになっている⁸⁾。馮さんの演説は6月初旬に行われたチームNⅡの公演終了時に行われたものである。劇場公演は現在その多くがインターネットで同時配信されており、筆者もネット中継を通じリアルタイムでその演説を視聴していたが、次の日には複数名のファンがそれを録画の上ネット動画サイトにアップしていた。すでに当該グループの動向を追って数年が経ち、現地に知り合いも多い筆者は、程なく応援会からの依頼を受け、本動画の日本語字幕の作成に参加した経緯がある。今回総選挙演説の動画を資料化するにあたっては、まず応援会がインターネット上にアップした動画アーカイブを参照し、その発言内容を再度吟味、翻訳、分析するという手順を踏んだ。

まず馮さんは幼いころの自分の生活から語り始める。「小さい頃、実際に私はとても利口な子どもだったので

す。ご存知ですよ。大連では子役スターで、番組も持っていたんですよ。

あのころ私は口が達者で、今より良く話せたんです。市場に行けば、明らかに初対面の市場のおばさんと、三十分も話し込みました。『おばちゃん、こんにちは。わたしは馮碩（フォン・シュオ）っていうのよ』——あのころ私は馮碩って自分のことを呼んでいたんです——『知ってる？私のお父さんったら預金通帳をピアノの中に隠してるんだよ。私の父さんはお医者さんで、私の母さんは教師をしているの。』小中学校ですつととても朗らかで、なんていうか、とても外向的な子どもだったんです。なんでも外の人に言いふらしてしまうんですよ。とても正直だったんです。』

この部分からは、彼女がとても活発で、利発な明るい女の子であったことが理解できるであろう。ところが思春期を迎え、彼女の生活が一変する。

「中学3年になって、大連から長^{だいれん}春^{ちやうしゆん}に引っ越ししたんです。実はこれはお父さんの仕事の事情で、わずか3日間で、学校や故郷を離れ、後へは引けず長春にやってきたのです——あのときは長春ってトウモロコシの場所なのねって思いました。

私は新しい環境への期待で一杯でした。あの時は二番目のお婆の、古い家に住んだのですが、向かいには心を病んだ旦那さんが住んでいたの。彼はとっても怖かったわ。あのことが私の子ども時代に暗い影を作ることになったんです。彼は廊下にゴミを積んでおくのが好きだったんですが、夏になるとそのゴミからゴキブリが沸き、私の家にまで入って来ました。

あのとき私はよく一人で留守番していたんですが、もうゴキブリだらけなんですよ。家の冷蔵庫の下にゴキブリがうじゃうじゃいて、私がゴキブリホイホイを差し入れると、5分後にはゴキブリが一杯になっているのを発見しました。その旦那さんはまた、酒瓶を持って私を追いかけ回し、私を追いかけて通りを2ブロックも走ったこともありました。

あのころ昼間は高校受験の勉強をしていたんですが、昼間は本を開けばゴキブリが一匹這い出して来て、夜に寝ようとすればゴキブリが顔の上を這っていきました。眼を開くと周りがゴキブリだらけなんですよ。

あのとき精神が参っちゃったんですね。友だちと話をしなくなったんです。精神が刺激されたせいか、記憶力にちょっと問題が出たようなんです。ものを覚えるのは早いんだけど、忘れるのも早いです。突然中学校の同級生やルームメイトを全部忘れてしまったこともありますよ。

あのときも刺激を受けても精神科のお医者さんに診てもらいたって言わなかった。これらのことは私の性格に深刻な影響を及ぼし、皆さんがみているような現在の変な様子になってしまったんです。自分が何を考えているか分からないこともあるし、公演のときも瞬く間に思考がどこかに飛んじやうこともあるんですよ。

高校では高2の時までとても無口で、一日二日は口をきかず、他人に対してとても冷淡でした。あのときは友だちが新しい友だちを紹介したいと思っても、私は彼女をじろりと睨み、『アンタうざいよ。近寄らないで。』なんて言っていました。最近皆さんが私のあの頃のSmart風のコスプレ写真を見つけ出したようですが、あの頃はとにかく反逆的で、世界に言いたかった。私は人類を嫌悪していて、この地球がひどく嫌いだと。』

以上で語られるのは、思春期に起こった環境の変化と、そこででのつらい体験が彼女の性格にどのような影響を与えたかに関する自己分析である。ただし彼女を心理学的に分析するのがここでの目的ではない。重要なのは、ありのままの自分をファンに知ってもらいたいとの思いが、世界中に配信されるネット中継における赤裸々な告白に繋がったのであろうということである。

次に彼女が語ったのは本論の主題に関わる極めて重要なことである。そのような彼女が現状から一歩を踏み出し、成長する機会となったのが、日本のアイドル文化であったということである。

「大学2・3年になって、いや、大学1年の時かな、AKBに注目しはじめたんです。ここでははっきりさせておきたいですけど、私はみんなが言うようなトップファンじゃないんですよ。どうしてこんなことが噂になったのか知りませんが。私は単純にAKBが好きただけだったんです。もともとこの年齢の女の子はこういうこと(筆者注：アイドルを追っかけること)をやると思うけど、私はそれまではまったくしなかったんです。化粧が嫌いで、自分を装うのが嫌で、髪はぼうぼうに乱れ、顔は垢だらけだった。全世界から隠れて生きるのが一番いいと望んでいたんです。」

ここで日本のアイドルグループを好きになったことが明かされ、今までの内向していた自分の意識がアイドルグループに感化されて、外に開かれていったことが示唆される。ここは極めて重要な部分である。

「その後に、だから無理やり自分に少しずつ話せるようにしていったんです。必ず話せるようにならなくちゃ、必ずみんなに本音を語らなくちゃって。」(※下線筆者)アイドルグループに入団した以上アイドルは単なる憧れの存在ではない。期待される役割をしっかりとこなし、

顧客に満足してもらうのが任務であり、自分へのこだわりや甘えは許されない。その最低ラインが達成できたうえで個性なのである。まさにその人の立ち位置や環境が人を変え、成長させていくのである。

さらに入団後の生活や成長についても、エピソードを差し挟みつつ言及する（やや下世話な内容もあるが省略せずそのまま記述する）。

「この団体に入ったのはとっても幸せなことでした。私たちのファンを含め、一人一人がみんな変な人たち、違った、みんな凄い人たちですね。以前自分がAKBを好きだったときはこうじゃなかったと思います。SNHファンはとてもしり気度、私たちととても近いところを歩んでいますね。もし二年前に戻って、たとえばマユユがツイッターで『体調の問題で握手会を欠席せざるを得ません』と呟いて、彼女のファンが「エへへ、手帳に控えておこう」なんてリプライをしていたら、ひどく驚いたことでしょうね。ファンはとてもしりきんだと思うわ。私にたくさんの喜びと笑いをもたらしてくれました。

この団体に入ってから、確かに楽しいことは不愉快なことよりも多いですね。多くのアンダー（代役）をこなしたことも含めてですが。こうしたことはたとえば公演前日に知らされるんですよ。「アイドルなんて呼ばないで」（筆者注：AKB48の楽曲）みたいに、つまり前の晩の深夜1時にこの曲を踊るようになって言われるんですよ。私はダンダンダンダンとレッスン場に起き上がってくるんです。お風呂から上がって髪がまだ濡れているっていうのに。

始めたばかりのころはあまりなじめないと思ったけれど、のちにこんな生活にも慣れました。結局はIQ140の頭脳ですからね（笑）。キャプテンになったのはまったくの偶然だと思います。これまでは全然そんな考えはなかったのです。入ったとしても自分のことをしっかりやればそれでいいってずっと願ってききましたから。」

ファンの見ることが出来るアイドルは、その日常の一面にすぎない。ついこの前まで一般の女子大学生であった彼女は、まだ駆け出しのアイドルと言ってよいだろう。しかし彼女が語るこれらの発言からは、人気職業である芸能界の厳しい面や理不尽なことを経験しつつも現実と対峙し、仕事の成果を糧にしてしっかりと成長している様子が読み取れるのである。

重要なのは、前項でも紹介したようにファンもそれを知りつつ、自己の日常と重ね合わせて共感し、自らが前向きに生きていくための糧としている点である。この点については今回実証が不十分で会ったことは否めない。継続して資料収集及びフィールドワークに努めたい。い

ずれにせよ、これこそがまさに日本発のアイドル養成団体が有するインタラクションの効果なのであり、社会教育的意義を含有する点であると考えられるのである。

おわりに

ここまで見てきて、中国におけるアイドル観をめぐっては、社会一般或いは大人の側と若者との間には共通する部分もあるが、両者にはなお少なからずのギャップがあることが分かる。前者は客観的・理性的ではあるがステレオタイプでやや生真面目すぎる眼差しでアイドル文化を解釈しているように認識される（2節）。その傾向は日本の状況よりもさらに顕著であるようにもみえる。それに対して自らが日本のアイドルを好きになり、活動に身を投じたことのある青少年自身は極めて自由にその画一化されたイメージを超越し、自由闊達に伸び伸びと文化的交流を実現し、ファン同士で交流を行い、同人文化を発展させ、それを通じたインタラクションを経験しつつ成長していると考えられる。3節の事例で紹介したように、一歩進んで自らその文化の担い手になろうとアイドル団体に飛び込む青少年も数多く存在するのである。

ファンにとって同時代を生きる等身大のアイドルとは、自分がこうありたいと願う理想の姿でもある。それと同時に、弱さや欠点を持つ自分の生き写しでもあり、さらにはファンの支えがなければ羽ばたくことのできない雛鳥でもあるのだ。このような見方には、一部においては2節で記述したような大人社会の側の考え方と共通する部分も存在する。しかし若者の側にはその理性に留まらない爆発的なチャレンジ性と自己実現への欲求及び実行力があるのが大きな相違点である。アイドル養成団体に所属するメンバーの体験に耳を傾けることでそれが見えてくる。また、ファンの側からすればそれは自己の居場所を確保しアイデンティティを確認する重要な活動である。劇場公演やコンサートのチケットを欠かさず購入してメンバーの歌やダンスを鑑賞し声援を送ること。周辺グッズや握手券、総選挙の投票券が入ったCDを大量購入して特定のメンバーの人気を支えること。握手会や誕生日の食事会等様々な行事を通じてアイドルに直接声をかけること。ブログへの書き込みを通じてアイドル及びファン相互の忌憚のないやり取りをすること。これらはみなインタラクションを実現し、そこから互いに学び成長していく可能性をも有する行動であるとも解釈できるのである。そうであればそこには一定の社会教育的意義も見いだせるのであり、その動向を結論を急ぐことなく見守っていく必要があるだろう。

謝辞

小論は平成27年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）採択テーマ「日本発アイドル養成と中国青少年の主体形成に関する実証的研究」（課題番号：15K13216）の皮切りとして執筆したものである。助成に対し心から感謝申し上げる。

註

（本論における註の記述方法は、日本社会教育学会研究紀要の規定に準じている。）

- 1) 拙稿「中国における日本大衆文化の受容と可能性に関する一考察——アイドルグループの誕生と成長をめぐって」『九州保健福祉大学研究紀要』、2015年3月、pp.77-87。
- 2) 東アジア協働体評議会のウェブサイトより。平成25年度の日中交流研究支援事業、報告書「未来志向の関係構築における日中青年交流の在り方」
<http://www.ceac.jp/j/pdf/study2/201402.pdf>
(2015年9月20日アクセス)
- 3) 龚乐颖「当代流行文化对青少年的文化」
http://www.cgzx.net/jyz/UploadFiles_2926/201209/2012091709441239.doc (2015年9月1日アクセス)
- 4) 李玲（编辑）「正确认识偶像崇拜对青少年的影响」榆林教育网
<http://y1.hsw.cn/system/2013/03/12/051623307.shtml>
(2015年9月8日アクセス)
- 5) 作文网（中学生向けの論作文サイト）の「校园“偶像热”的冷思考」より。
<http://www.t262.com/zuowen/68/106357.html>
(2015年9月9日アクセス)
- 6) 中国の問答サイト（質問を起点に知識・経験・見解の交流を行うサイト）「知乎」（知るや）における「初菱さん」の投稿（2015年5月22日）より。
<http://www.zhihu.com/question/29447001>
(2015年9月20日アクセス)
- 7) 「百度百科」（インターネット上の百科事典）の人物解説より。
<http://baike.baidu.com/subview/5005329/11067243.htm> (2015年9月1日アクセス)
- 8) 2015年6月2日の公演において行われた総選挙のための「政見放送」。
<http://www.tudou.com/programs/view/B0K8hqPQSyE/>
(2015年6月1日アクセス)
<http://www.tudou.com/programs/view/18NfWXMIByI/>
(2015年7月1日アクセス) 等、複数のサイトで視聴可能である。